

賛否など態度決定に至った理由・討論

令和 7 年 6 月定例会	
議案番号 議案名	議案第 10 号 副市長の選任について
議員名・会派名等	日本共産党 うつの史行
賛否態度	反対
賛否など態度決定 に至った理由や 討論	私たち日本共産党は、本会議および委員会での討論という議員の権能を最大限に活かすことこそ責任であると考えます。 非公式のこの場に、議会で発言してもいない議員が意見を掲載するというやり方は、議員自らが議会における議論を軽視する行為であるとの考えから、以下、本会議・委員会など公の場で討論した内容(抜粋)を掲載いたします。 ＊＊ 以下 ＊＊ 日本共産党のうつの史行です。議案第 10 号副市長選任につきまして、会派を代表して討論します。 複数の議員からの質疑・答弁を通じてなお、疑念は晴れないどころか深まったというのが正直な受け止めです。 何より選挙からわずか 2 週間、3 週間でその結果の意味に市民から疑問が呈されるような事態を招いたのは残念と言わざるを得ません。 市長はスピード感が大事だとお考えのようですが、市民の理解・感情への配慮は考えなかったのでしょうか。候補者への人事の内容についてはこれでもかと配慮が語られましたが、スケジュールを見れば市民感情への配慮はほとんど念頭になかったスピード感と考えます。そんなスピード市民は望んでいません。 小玉氏について私は最初の副市長人事において、質疑し賛成討論まで行いました。 行政の立場からその専門性の発揮を期待できる人物であるとの考えからです。 本郷谷市長が辞職され、市政の空白を副市長として補い、新市長のもとで引き続き副市長を務める、というのであれば何の異存もありません。 しかし本郷谷市長とともに副市長の任から離れ、行政ではなく政治の側に身を投じる判断をしていまいしました。これはかつて人事に賛成し

	た身として大きなショックでありました。期待が裏切られた気分であった、というのが率直な感情です。 先の質疑で「政治家である市長は 2 人もいない」という話をしましたが、その懸念が深まる本議案には到底、賛成するわけにはいきません。 さて、春秋戦国の末期、中国の勾踐(こうせん)という王が、呉との戦いに敗れ「自らを呉の臣下・家臣である」と称し、呉の王・夫差(ふさ)に仕えることを誓いました。 これは「軍門に降る」という故事成語の元となった出来事です。 勾踐を王に頂き支えた者たちも当然、勾踐とともに夫差の軍門に降ることになります。 私には今回の一連の流れが、重なって見えます。 果たしてこれを是として良いのでしょうか？政治家としての矜持が問われる議案であります。 一方、この故事には続きがあります。 呉王に仕えた勾踐(こうせん)は、呉の支配に対し復讐を誓い力を蓄えたのち、今度は呉を滅ぼすことに成功しました。その際、勾踐は部屋に吊るした苦い肝を毎日舐め、復讐心を忘れないようにしたといいます。 これが「臥薪嘗胆」という故事成語の語源です。 果たして 4 年後、どのようなことになっているのでしょうか。 そしてそんな争いに市民そっちのけで腐心されていては困ります、ということをあらかじめ釘を刺しておきたいと思います。 本件が、松戸発のあらたな故事成語とならないようお願い、議案第 10 号への反対討論といたします。
--	--